## ▲▼▲第43回クリエイティブサロン (2016年1月9日)開催報告▲▼▲

第1部講演会:「創造的な問題解決のための一般的な方法論(CrePS) - 新しいパラダイム: 6箱方式- - 簡潔な一貫プロセス: USIT」

講師:中川徹 (大阪学院大学名誉教授、クレプス研究所代表)



5月14日のクリサロの第一部の講演では、表記のように非常に包括的な話をしましたが、話の内容は明確なものです。最初のスライドは、「問題提起と結論」でした。

問題解決/課題達成を創造的に行うための方法が、永年に渡って研究され、多数の多様なものが開発・実践されてきました。しかし、現在それらはバラバラで、例えば、「高等学校で一学期間の授業をする」標準的な内容は作れていません。「創造的な問題解決の方法の全体をまとめることができないのか?それをまとめる骨格になる方式(パラダイム)がないのか?統合した一般的な方法論はどんなものか?それを簡潔に実践するプロセスはどんなものか?」というのが、問題提起です。

私の結論は、「まとめることは可能だ。「6箱方式」を骨格にすると、創造的な問題解決の一般的な方法論ができる(CrePS(クレプス)と命名)。 簡潔に実践する汎用のプロセスは、USIT(ユーシット)として開発済みである」というものです。

私はまず「6箱方式」を説明し、それを導いた歴史的展開を話しました。従来の科学技術一般と創造性技法が土台にしている抽象化の「4箱方式」の問題点を話し、TRIZとUSITの研究を経て、CrePSができてきたこと。「6箱方式」は言われてみれば「当たり前」であること。1999年からUSITを導入・実践しており、そのマニュアルと適用事例集を説明しました。

活発に40分の討論がありました。その中心は、問題を明確にする最初の段階が問題状況と分野に依存しており、特定の技術課題ではない場合の難しさ、非技術の分野への適用の可能性/やり方などでした。TRIZをビジネス分野にも適用している人たちはいろいるいます。最近、私は『下流老人』(藤田孝典著)の論理の「見える化」をし、「自由vs. 愛」が「人類文化の主要矛盾」だと認識したことを、CrePSの適用例として話しました。詳しくは、『TRIZホームページ』をご覧ください。 (記事:中川徹)

## 第2部講演会:「発想の転換、単純な手法」

## 講師:大西瞳氏(㈱マインドスケープ チーフプロデューサー)



小さい頃、開発が進む郊外の空地で、花を見つけては母親に名前を教えてもらい、家に飾っていました。その頃は、様々な虫や野良犬や野良猫が至る所にいて、日が暮れるまでそれらと戯れる日々でした。年とともに空地も減り、動物や虫も少なくなり姿を消して行きました。その後、縁あって、高知県と言う自然豊かな地域で大学時代を過ごし、幼少期のように動植物と戯れる日々を送ることが再び出来たことが、わたしのその後の人生に大きく影響を及ぼしています。

植物は、人間の生活にとって不可欠なものです。私たちの身の周りを見渡せば、植物由来のものがほとんど。食べ物、衣類、薬、建築、家具、紙、筆記用具等々、植物と無関係のものを探す方が難しいほどです。しかし私たちは、普段そのことをあまり意識せずに生活しています。そこで私は、出来るだけ多くの人が植物をもっと意識し、興味を持ってもらえるよう、現在の仕事をしています。植物は単純で自分勝手で、あざとく、強かな生き物です。でも自分で移動できないという弱点があります。なので人間がうまく手助けをして、かれらの生活域をつくり、守ってあげます。そんな中で、我々が行った仕事を例に紹介しました。

『芝生のベンチPeddy』 一芝生で寝転がったり座ったりと気持ち良さそうな写真をよく目にしますが、実際は、何かが落ちているのではと座るのを戸惑ったり、地べたに座ることに抵抗を感じたり、高年齢化により、足腰を痛めて座れないなどという事が多くあります。そこで、座れる高さに芝生を配置する設計の試みを行ってきました。そしてそれが、固定ではなく、移動可能なものとして、Peddyが生まれました。Peddyは、生き物です。植物ではありますが、ペットのように世話をすることを必須としています。水をやったり、カットをしたりして、育てて行くファニチャーです。Peddyは1つの例ですが、発想を転換し植物の性質をより知ることで、もっと柔軟に自分の生活に植物を取り入れることができます。そして、彼らと共存することで、我々人間が得るものは計り知れないことをもっと多くの方々に知ってもらうべく、仕事を続けて行こうと思っています。